

CNEAS



東北大学

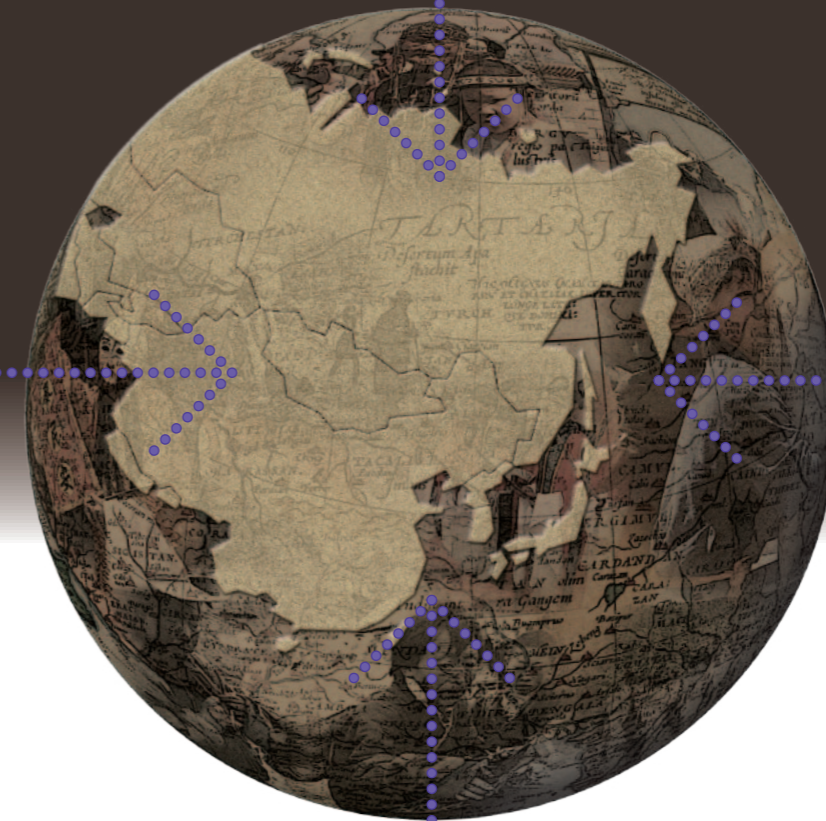
東北アジア
研究センター

東北大学
東北アジア研究センター
要覧

Survey and Guide
Center for Northeast Asian Studies
Tohoku University

Center for Northeast Asian Studies

Tohoku University



東北大学

東北大学
東北アジア研究センター

〒980-8576
宮城県仙台市青葉区川内41番地
TEL(022)795-6009
FAX(022)795-6010
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp>

2017年9月30日発行



contents

ごあいさつ	2
理念・機構	3
沿革	4
教職員紹介	6
東北アジア研究の最前線	8
共同研究	10
個人研究	12
20周年記念特集	26
国際学術交流	28
社会との連携	29
データ編	30

ごあいさつ

東北アジア研究センターは2016年に設立20周年を迎えました。東北大学の研究所型組織（部局）として、文系と理系の研究者が問題意識を共有しながら独自の地域研究を行っています。

研究使命は、日本に隣接する北方のアジア世界つまり中国・朝鮮半島・モンゴル・ロシアを総合的に理解することにあります。従来の国家をベースにする研究ではなく、広域的な視点を持ち、学際的アプローチと応用性を探求するという点に特徴があります。文系内部での既存分野を越境することはもちろん、文系と理系の連携研究を進めているほか、専門的知見の社会実装化に挑戦してきました。

最近行われているのは、例えば20世紀大国比較史、越境環境汚染と移民といった人文社会科学的課題から、温暖化する北極圏と先住民、人類の寒冷環境適応と生物地質史といった文理融合的課題、さらに遺跡探査工学、文化遺産のデジタル化、災害対応人文学といった応用領域です。いずれも従来の地域研究では見過ごされてきた問題であり、その解明は地域研究の方法そのものを刷新しつつあります。

専任教員の専門分野は、言語学・歴史学・文化人類学・環境政策・生態学・地質学・資源工学・環境情報学等と多様です。ディシプリンを異にする研究者が一つの組織として日常的に接することで、地域研究の新しい課題と方法を発掘する場となっています。また学内の関連研究者を兼務教員として受入、常時二名の外国人客員教授の招聘制度、公募型を含む共同研究体制を整えることで、学内連携や国内外の研究者や研究組織との連携体制を構築しています。

センター教員は、専門領域に応じて東北大学の大学院や学部における教育にも従事しています。日本学術振興会の特別研究員や内外の研究員をも積極的に受け入れ、若手研究者の育成も行っています。また地域研究の基盤となる東北アジア諸国の言語教育を全学教育で提供するなど、アジア地域に幅広く関心をもつ人材育成に関わっています。

今後の東北アジア研究センターの中核的な関心は、「環境と移動」というキーワードでまとめることができるのではないかと考えています。センターの教員の興味は当然多種多様ですが、大きくいえば、自然史や人類史的な背景を含む環境史・災害史的な問題領域と、現代の国際秩序のなかに生起する文化・社会・国家の交差という問題領域が発展しつつあると考えるからです。これに関連する大型プロジェクトも動き出しつつあります。その一つは2016年4月から発足した人間文化研究機構の「北東アジア地域研究推進事業」への参画機関としての参加です。それ以外にも関係する複数のプログラムが動き始めています。これらを通して、新しい東北アジア地域研究を学界と社会にむけて提案できると考えています。

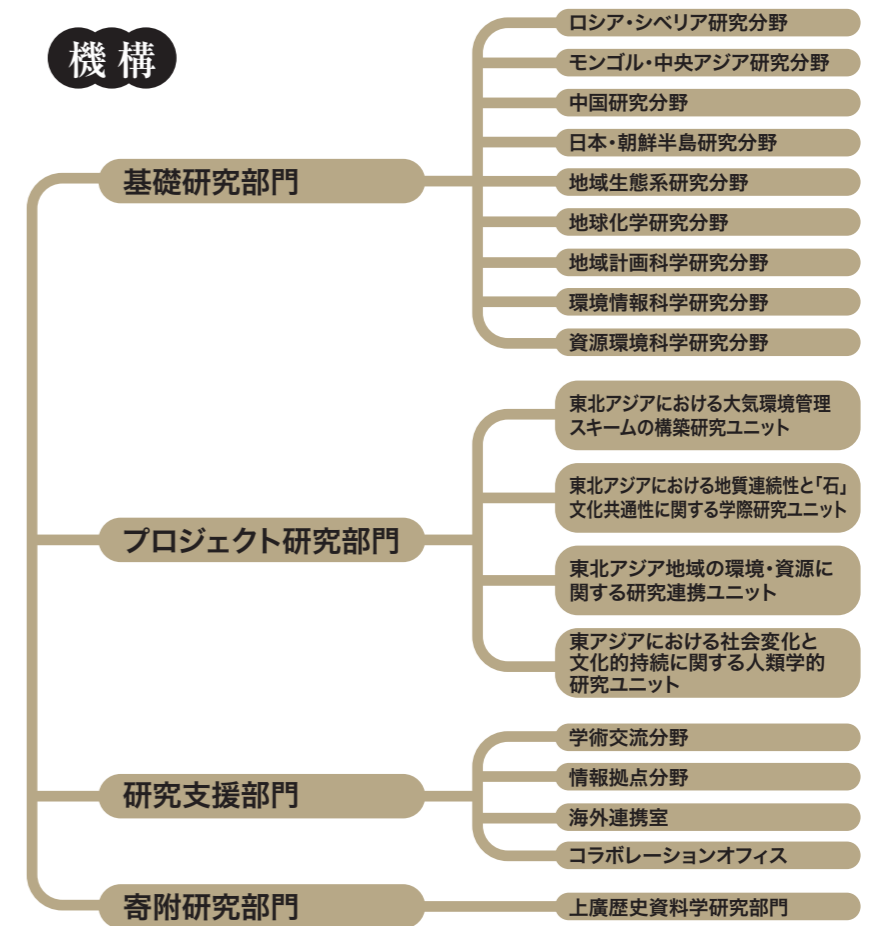
日本社会が必要とするアジア理解を、北方視座のアジア地域研究から提供する東北アジア研究センターが、より大きな役割を果たすべく、研究の深化と成果の発信につとめてまいりたいと思います。



2017年4月 センター長 **高倉浩樹**



機構



理念

本センターは、東北アジアという地域理解の枠組みを確立し、普及させることを第一の目的としています。東北アジア研究センターが設立された1996年以後の20年間は、まさに東北アジアが地域枠組みとして実質化していった時代だったと言えます。中国の経済発展と日本・韓国などの結びつき、ロシア、モンゴルのアジア太平洋国家としての再定義と東アジアとの関係構築、そして中国とロシアを中心とする関係調整機構の出現など、今やロシアのシベリア・極東、中国、朝鮮半島、モンゴル及び日本から成る東北アジアは、冷戦時代とは比較にならないほど密接な関係をもっています。北アジア、東アジアといった既存の地域概念では、現今の状況を捉えることができなくなっているのです。しかしわが国では、未だに日中・日露・日韓などといった二国間関係の枠組みでの理解を克服できておらず、日本が東北アジアの一部としてあることも十分に認識されているとは言えないのが実情です。東北アジア地域概念の確立は、わが国にとって急務であると言えます。

地域研究に求められるのは、実践性です。経済発展の中で、東北アジアは今急激な変化を経験しています。変化への戸惑いは、ときに深刻な亀裂を社会に走らせませす。開発に伴う環境問題、民族の対立、歴史認識、領土問題などなど、亀裂の露頭はじつに様々な形で現れます。そのような課題を、広域的枠組みにおいて共有することが重要です。一方で東北アジア地域内では、すでに多くのものが共有されています。地域の文化的な価値をどのように評価し、何を残し、何を変えなければならないのか。正負の遺産にどのように向き合うのか。それが東北アジア地域研究に求め

られている課題です。特に重要なのは、研究者と地域住民の協働です。地域研究とは、学者が一方的に分析結果を提示するのではなく、地域住民が継承・創出しようとする文化のあり方をともに考えていくことです。

地域研究への要請は、けっして地域住民の社会・文化の領域にとどまりません。地域の山河も、そこに住む人々が生を営む、人間的な意味づけを与えられた「環境」としてあります。ですから「自然環境」の研究も、地域研究の対象にほかなりません。地域研究において学際性が要求されるのは、学問が細分化されているからではなく、地域「環境」の多様性とそれに与えられた意味の包括性に起因するのです。

それゆえ東北アジア研究センターは、文系・理系のさまざまな研究分野の連携によって、地域を見つめる多様な視座を確保することをめざします。我々は、高度に専門化し、分厚い蓄積をもつ諸学の成果を有しています。地域研究の学際性とは、専門研究の到達点を安易に否定することではなく、その蓄積を地域理解のために動員し、活用することです。文系・理系の研究者の連携を確保し、諸学がそれぞれの分野で東北アジアを考えることで、地域のより多様な課題を視野に取めることが可能となります。

また地域研究者にとって、地域の研究者達の研究成果と向き合うことなくして、研究は成り立ちません。我々が彼等を研究するように、彼等も我々を研究しています。我々には、東北アジアの研究者コミュニティの一員として、そのような双方向性をもった東北アジア地域研究を進めていくことが求められています。



沿革

20世紀末の急激な冷戦構造の解体、経済・情報のグローバル化を背景として、シベリアや中国・朝鮮半島など日本に隣接する地域との相互理解と協力、共生することの重要性が広く一般に認識されるようになった。東北大学はシベリアの資源・科学技術等の重要性に着目し、1991年以来全6回のシベリア訪問団を組織し、1992年にはロシア（当時、ソ連）科学アカデミー・シベリア支部との間で大学間学術交流協定を締結した。

1996年5月東北大学は、冷戦構造の崩壊以降の日本が隣接する広域世界のダイナミズムを理解することの重要性に鑑み、大学附属の学内教育研究共同施設として東北アジア研究センターを発足させた。北アジア・東アジア・日本を包摂する東北アジアという新たな地域概念を提示し、その歴史－文化・民族－国家・生態－環境に関わる諸問題を人文社会科学と自然科学との連携によって融合的、総合的研究を推進するのが設置目的であった。

東北アジア研究センターは、東北大学初の文系を主とする研究所型組織（部局）である。その組織構成は、1962年以来の文学部附属日本文化研究施設を母体として、文学部・理学部・工学部・言語文化部の協力の下に整備された。発足当初、所属する教員は東北大学内の3つのキャンパスに分散していたが、1999年以降、全研究施設が川内キャンパス内におかれている。発足時の組織構成は、3基幹研究部門（地域交流、地域形成、地域環境）、2客員研究部門（文化・社会経済政策、資源・環境評価）、教官26名・客員5名（うち2人が外国人）で構成された。その特徴は、部門内に文理双方の分野を含む研究体制にあった。2004年4月の国立大学の法人化を経て、2007年4月には研究体制の抜本的な改革を行い、基礎研究部門（教員が所属する9研究分野）、プロジェクト研究部門（現在、4研究ユニット）、研究支援部門（2分野、1室）という体制となった。更に2009年4月にコラボレーション・オフィスを開設し、研究企画、情報発信機能の充実と共に人文社会系他部局との連携を推進する体制を整えた。これにより、個人ベースの基礎的研究を着実にすすめて、多くの研究者による総合的課題や、実践的・応用的な研究課題にも即時的かつ柔軟に対応できる体制とした。2016年には東北アジア研究センターは設立20周年を迎えた。これに先立ち2015年12月には記念式典及び国際シンポジウム「東北アジア：地域研究の新たなパラダイム」を開催した。そこでは16の文系・理系にまたがるセッションが開かれ、内外67人（内18名は国外研究者）の研究者が新たな地域研究の可能性を模索した。

本センターは、東北アジアを対象とする地域研究機関として、外国人研究員（客員教授）制度や学術交流協定などを通して関係各国・地域の研究者との交流を広く進めている。1998年5月には東北大学初の海外事務所として、シベリア最大の都市ノボシビルスクに隣接する研究学園都市アカデムゴロドクにシベリア連絡事務所を開設した。その後、共同ラボラトリーと名称を変更し、ロシア科学アカデミー・シベリア支部との共同研究推進を目指すと共に、東北大学が同所に設置した東北大学ロシア代表事務所・シベリア支部との連携をとりながら、我が国の大学とロシアとの交流にも協力体制を築いてきた。

流動組織としてのプロジェクト研究部門に加え「共同研究」制度を設け、複数の教員からなる目的を絞り込んだ研究組織の立ち上げを奨励するとともに、時代に即した学問領域を広げるため、学内にとどまらず国内外の関係する研究者とのネットワーク構築を支援する各種制度を発足させている。研究活動の成果は、1997年に創刊された査読雑誌「東北アジア研究」をはじめ

めとしてその他の学術雑誌・学術書籍で発表されている。それ以外に、「東北アジア研究センター叢書」「東北アジア研究センター報告」「東北アジア研究専書」などの本センター独自の出版物も用意し、研究成果の情報発信を促している。更に東北大学出版会と協力しながら「東北アジア読本」としてセンターでの研究活動をシリーズとして出版することで、一般市民の方により見ていただきやすい仕組みを作った。2016年度末までにそれらの刊行数は176冊となっている。

最近の大型資金プロジェクトとしては、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「東アジア出版文化国際研究拠点形成及びアジア研究者育成事業」（2007-2009年）、文科省科学研究費補助金「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在の研究」（基盤A：2011-2014年）、「圧縮センシングと最適空間サンプリングによる地雷探知用レーダー・イメージングの効率化」（基盤A：2014-2018年）等があるほか2016年度からは大学共同利用機関法人人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」、文科省補助事業「北極域研究推進プロジェクト」を受託し、拠点的な活動を実施している。

一方、地域の人間と社会を災害から守るための実践的防災学推進をめざして、本センターを中核に、東北大学の広い研究分野の研究者が目的を一つとする「防災科学研究拠点グループ」を結成した。従来型の体系的な防災技術に留まらず、住民に対する防災意識の啓蒙や災害時の資料保全への対応など文系的なアプローチを含めた幅広い地域活動を展開したことが特色である。2011年3月の東日本大震災では、本グループが東北大学の叡智を結集し地域の復旧・復興への具体的な活動を行うだけでなく、これまで蓄積してきた災害科学を東北大学の重要な研究の柱の一つとするための最大限の努力を続け、災害科学国際研究所の設置に結びついた。

災害実践研究に絡んでは、2011年～2013年にかけては文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」に関わり宮城県地域文化遺産復興プロジェクトに参加した。また地中レーダー技術の開発は自治体や県警と協力して震災に関わる遺留品探索活動に結びついている。歴史資料保全の活動は、2012年度に設置された上廣歴史資料科学研究部門（寄附研究部門）が担っており、2017年4月には第二期5年が始まった。

さらに2004年に発足した地域研究を推進する大学・研究機関・NGO等の全国組織体「地域研究コンソーシアム」設立に関わるとともに、2005年には「北東アジア研究交流ネットワーク」（当該地域に関わる研究機関・各種シンクタンクなどの交流組織）の設立にも貢献した。これらを通して他大学・研究教育機関、さらに民間組織などとの連携を進めている。

歴代センター長

初代	吉田 忠	1996. 5.11	—	1999. 7.31
第二代	徳田 昌則	1999. 8. 1	—	2001. 3.31
第三代	山田 勝芳	2001. 4. 1	—	2005. 3.31
第四代	平川 新	2005. 4. 1	—	2007. 3.31
第五代	瀬川 昌久	2007. 4. 1	—	2009. 3.31
第六代	佐藤 源之	2009. 4. 1	—	2013. 3.31
第七代	岡 洋樹	2013. 4. 1	—	2017. 3.31
第八代	高倉 浩樹	2017. 4. 1	—	現在に至る



教職員紹介 (2017年度)

センター長 **高倉 浩樹**

基礎研究部門

ロシア・シベリア 研究分野

教授
寺山 恭輔
ロシア・ソ連史 日露・日ソ関係史

教授
高倉 浩樹
社会人類学 シベリア民族誌

助教
塩谷 昌史
ロシア経済史
統治技術の歴史

兼務教員 (教授) (文学研究科)
阿子島 香
考古学 先史学

モンゴル・中央アジア 研究分野

教授
岡 洋樹
東洋史 モンゴル史

准教授
柳田 賢二
言語学 ロシア語学
言語接触の研究

中国 研究分野

教授
瀬川 昌久
文化人類学 華南地域研究

教授
明日香 壽川
環境政策論

准教授
上野 稔弘
中国現代史 中国民族学

日本・朝鮮半島 研究分野

准教授
石井 敦
国際関係論 科学技術社会学

助教
宮本 毅
火山岩岩石学 火山地質学

地域生態系 研究分野

教授
千葉 聡
生態学 保全生物学 進化生物学

准教授
鹿野 秀一
微生物生態学 システム生態学

地球化学 研究分野

教授
辻森 樹
地質学 変成岩岩石学

准教授
平野 直人
海洋底科学 テクトニクス
地質年代学 岩石火山学

助教
後藤 章夫
火山物理学 マグマ物性

兼務教員・教授
中村 美千彦
火山学 岩石学 地殻流体

地域計画科学 研究分野

兼務教員 (教授) (災害科学国際研究所)
奥村 誠
土木計画学 交通計画

環境情報科学 研究分野

教授
工藤 純一
デジタル画像理解学

非常勤講師 (山形大学)
柳澤 文孝
地球環境学

非常勤講師 (東北工業大学)
河野 公一
衛星画像処理 リモートセンシング

非常勤講師 (南ミツバテクラスルス)
伊藤 正直
ロシア政策論

非常勤講師 (国立研究開発法人産業技術総合研究所)
永谷 泉
環境リモートセンシング

資源環境科学 研究分野

教授
佐藤 源之
電磁波応用工学 地下電磁計測

助教
菊田 和孝
計測工学

助教
郷 立龍
計測工学

非常勤講師 (仙台高等専門学校)
園田 潤
計算電磁気学

研究支援部門

学術交流分野

助教
内藤 寛子
現代中国政治 比較政治

寄附研究部門

上廣歴史資料学 研究部門

准教授
荒武 賢一郎

助教
高橋 陽一

助教
友田 昌宏

非常勤講師・客員教授 (宮城学院女子大学)
平川 新

非常勤講師・客員教授 (宮城学院女子大学)
平川 新

非常勤講師 (国立研究開発法人産業技術総合研究所)
永谷 泉

東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット

兼務教員 (准教授 文学研究科)
山田 仁史
神話学 民俗学

東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット

兼務教員 (准教授 教育学研究科)
李 仁子
文化人類学 在日移民研究

兼務教員 (准教授 文学研究科)
川口 幸大
文化人類学

教育研究支援者

田中 利和
生態人類学

宮後 裕亮
環境政策論

李 善姫
ジェンダー人類学

客員研究支援者

金丹
人間文化研究機構
総合人間文化研究推進センター研究員
環境経済学

デレーニアリーン
文化人類学
オールボー大学理工学部准教授

研究支援者

木村 一貴
進化生態学

平野 尚浩
進化生態学

リサーチ・アシスタント

城所 喬男
日本思想史

日本学術振興会 特別研究員

井上 岳彦
歴史学

大石 侑香
社会人類学

齊藤 匠
進化生物学

内田 翔太
保全生物学

外国人研究員 (客員教授等)

Klpoma Kazi A
カルボマ・カジェ
(アメリカ国際大学バングラデシュ上級准教授)
2017.4.1 ~ 2017.6.30

Schilthuis Menno
スヒルトハウゼン メノ
(ライデン大学教授)
2017.5.7 ~ 2017.7.6

Boniface Nelson
ボニフェイス ネルソン
(ダルエスサラーム大学地質学科上級講師)
2017.7 ~ 2017.9

Tsai Chin-Ho
ツァイ チンホウ
(国立東華大学自然資源環境学系)
2017.7 ~ 2017.9

Friedt Jean-Michel
フリート ジャン ミッシェル
(フランシュ コンテ大学 (ブザンソン) 准教授)
2017.10 ~ 2017.12

Litvineko Tamara
リトビネンコ タマール
(ロシア科学アカデミー地理学研究所上級研究員)
2018.1 ~ 2018.3

日本学術振興会 外国人特別研究員

ダニエル
地質学

グライブヤン ビャンパー
環境社会学

技術補佐員 (研究室所属)

中井 直子
柳沼 智子

事務補佐員 (研究室所属)

松村 美加
後藤 三夫
伊東 幸恵
井上 瑠菜
今井 亜希
佐々木 結恵
高橋 直道
佐藤 匠 (8/19 ~ 11/12)

派遣職員 (研究室所属)

加藤 雅子

事務室

事務長
山木 幸一

専門員
高谷 敏晶

主任
清水 俊和
高橋 千秋

事務補佐員
前川 順子
及川 二美
横山 尚子
鈴木 理恵子

図書室

事務補佐員
佐々木 理都子
海口 織江

コラボレーション オフィス

事務補佐員
熊谷 香
畠山 瑞

北東アジア研究 交流ネットワーク

事務補佐員
八島 隆之



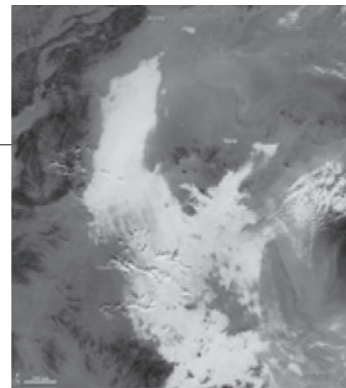
東北アジア研究の最前線

work 01

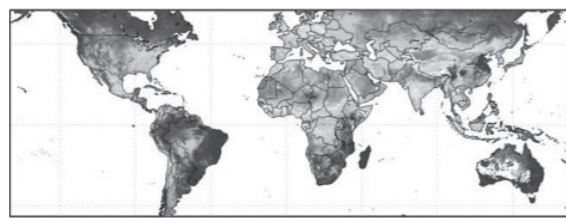
東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット

代表：明日香 壽川

国境を越える大気汚染と気候変動問題



大気汚染物質の移動の様子



衛星写真の分析による世界でのPM2.5汚染状況図(2001年～2006年)

中国はPM2.5(微小粒子状物質)などによる大気汚染に悩まされており、日本への越境汚染も懸念されている。一方、中国でも日本でも温室効果ガス排出削減を目的とした温暖化対策は喫緊の課題である。また温暖化による被害への適応策の策定も必要である。このような状況のもと、日本、中国、そして韓国を含む東アジアにおける統合的な大気環境管理に向けた汚染物質排出削減戦略の国際的な合意形成に資する研究が求められている。本研究は、中国の大気汚染対策、日中韓の温暖化対策、越境汚染、日中韓協力という現時

点で最も政策ニーズの高い環境および政治問題の一つに対して文理融合的なアプローチから学際的そして総合的に研究を行う。科学的な現象解明や経済

モデルによる計算を行うだけではなく、日中韓の3国間の緊張関係の緩和にも資するような政策提言型の研究をめざす。

work 02

東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット

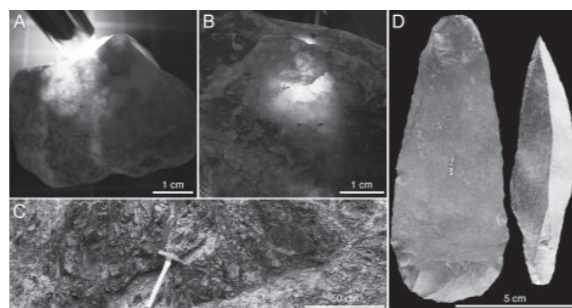
代表：辻森 樹

文理クロスオーバー型啓蒙活動のモデルの新提案

我々人類は「石」を道具として使う事を覚え、それを加工することを発明した。宝石を用いた装身具など、先史時代に構築された特定の「石」(岩石や鉱物など)の価値観は、現代文化にまで引き継がれている。東アフリカの大地溝帯から現生人類が拡散し、その移動と進化の過程で多様な民族への分化が起こり、アジアにおいても異なった集団毎に固有の「石」文化が展開した。本学際研究ユニットは、人類がその営

みのなかで特別な価値を見出してきた「石」に着目し、アジア最古の現生人類から現代人に続く約8万年間に人類が好んだ「石」の個性を地質学・岩石学的に総括する。東北アジアの地域像の

変化を先史時代から現代までの時間フレームのなかで追跡し、先史時代の「石」の地域物流からグローバル化による近世・近代の広域物流まで、人類の手による「石」の運搬を総理解する。

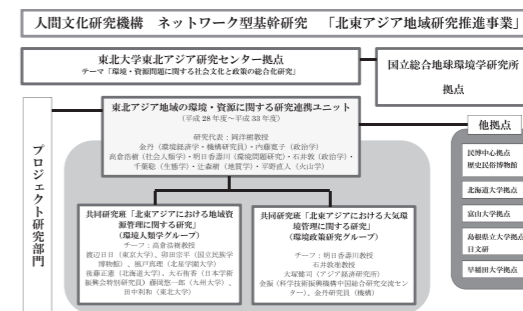


(A)新潟県糸魚川地域の蛇紋岩に伴って産する硬玉(宝石質のひすい輝石岩)。硬玉は、Plate tectonic gemstones (Stern et al. 2013) の1つ。(B)台湾花蓮県壽豊郷地域、玉里変成帯の蛇紋岩に伴って産する軟玉(宝石質のネフライト)。Yui et al. (2015) 参照。(C)岡山県新見市、大佐山蛇紋岩メランジュのマトリクスを構成する蛇紋岩の露頭写真。辻森(1998)参照。(D)山形県新庄市高倉山遺跡出土の後期旧石器時代のエンドスクレイパー(左)、ナイフ形石器(右)。写真は鹿又・佐野(2016)より。

work 03

東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット

代表：岡 洋樹



仙台での国際シンポジウム



東京での研究会の様子

人間文化研究機構『北東アジア地域研究推進事業』 東北大学東北アジア研究センター拠点の組織・運営

本ユニットは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構(NIHU)のネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」に参画する東北大学における拠点として、同機構の国立民族学博物館(中心拠点)、国立日本文化研究センター、国立総合地球環境学研究所、国立歴史民俗博物館、

機構外拠点である北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター及び早稲田大学総合研究機構現代中国研究所と連携して、東北アジア地域に関する学際的・国際的研究を推進します。このプロジェクトで我がセンターは、総合地

球環境学研究所とチームを組み、「環境・資源問題に関する社会文化と政策の総合化研究」を分担テーマとし、共同研究を運用するとともに、事業に参加する各拠点との実質的な研究協力を推進します。

work 04

東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット

代表：瀬川 昌久



観光地で披露される少数民族の舞踊(広東省)

変わりゆくものと変わらざるもの —東アジア編

近年の中国、日本、韓国等東アジア諸社会においては、グローバル化による都市化、少子高齢化等の進展にとともに、急激な社会変化が体験されつつある一方において、旧来からの社会慣行や文化的価値観の持続や再生現象もまた根強く観察される。そうした「文化の持続」にかかわる諸現象は、行政や企業などの主体による伝統文化の客

体化や商品化といった操作的・功利的レベルと、個人や地域社会によるアイデンティティ確立への希求といったより本源的レベルの、2層において同時に進行しているものと考えられる。本ユニットは、こうした2つの層の事象にそれぞれ目配りしつつ、家族・親



再建された祠堂(広東省)

族関係、移住、観光など多様な側面から社会変化と文化的持続の問題に取り組みいくつかの共同研究プロジェクトを遂行し、摩擦、衝突、妥協、変形、再定義等の過程を含む両者間のダイナミズムについて総合的に明らかにして行くことを目指す。



共同研究

2017年度東北アジア研究センター・プロジェクト研究ユニット、共同研究一覧（2017/7月現在）

プロジェクト研究ユニット			
代表者	ユニット名	年度	
辻森 樹	東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット	2016-2021	
明日香 壽川	東アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	2014-2019	
岡 洋樹	東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット	2016-2021	
瀬川 昌久	東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット	2017-2020	
共同研究			
代表者	課題名	年度	
明日香 壽川	中国における新しい石炭政策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性	2014-2019	
石井 敦	北東アジアにおける日本のソフトパワー	2016-2018	
高倉 浩樹	東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する実証的共同研究	2016-2018	
千葉 聡	遺跡にみる生物多様性研究	2015-2017	
岡 洋樹	東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究	2015-2018	
平野 直人	根室半島～歯舞群島・色丹島の前弧マグマがもたらす地域環境システム	2017-2018	
内藤 寛子	複眼的方法論からみる中国における権威主義体制の強靱性	2017-2017	
瀬川 昌久	族譜編纂活動における現代中国人の歴史意識の研究	2017-2020	
後藤 章夫	蔵王火山の活動の熱的・地球化学的モニタリング	2017-2019	
岡 洋樹	東北アジア諸地域における清朝統治の歴史的意味に関する比較研究	2017-2019	
川口 幸大	移動と流行：移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの	2017-2019	
佐藤 源之	地中レーダによる遺跡探査の推進	2017-2019	
柳田 賢二	オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究	2017-2019	
宮本 毅	南三陸・仙台湾地域を対象とした次世代ジオツーリズムの構築	2017-2019	
公募型共同研究（29年度採択課題）			
代表者	課題名	年度	
田村 光平	東北アジアにおける地質環境と「石」文化の長期的相互作用の研究	2017	
大森 紀之	仙台市博物館所蔵の矢羽の同定に基づくオジロワシ・オオワシの復元	2017	
鹿山 雅裕	宝石資源を持つ自然遺産の持続可能な保全のための学際的研究	2017	
坂本 剛	ウランバートル・ゲル地区における住まいの複層的調査を通じた都市環境問題解決策の提言	2017	

〈2016年度獲得科研費一覧〉

No.	研究種目	代表者氏名	職名等	研究課題名	課題番号
1	基盤研究(A)	佐藤 源之	教授	圧縮センシングと最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダ・イメージングの効率化	26249058
2	基盤研究(B)	岡 洋樹	教授	東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理：中露・蒙中辺境に着目して	15H03128
3	基盤研究(B)	千葉 聡	教授	化石記録から種分化プロセスに迫る：孤島の陸貝化石に見る多様性進化	15H03743
4	基盤研究(B)	辻森 樹	教授	現行型沈み込み帯出現の地質学的証拠：古原生代、高圧中間帯変成帯の総合研究	15H05212
5	基盤研究(B)	柳田 賢二	准教授	オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究	16H05657
6	基盤研究(C)	磯部 彰	名誉教授	明清教派系宝巻盛衰の研究―武神と聖母神信仰をめぐって―	25370040
7	基盤研究(C)	李 善姫	教員研究支援者	移住女性の「新移民コミュニティ」活動と社会的資本に関する国際比較研究	15K01908
8	基盤研究(C)	栗林 均	教授	近世モンゴル語の成立過程の研究	15K02500
9	基盤研究(C)	荒武 賢一朗	准教授	17～19世紀日本列島における尿流通の基礎的考察	15K02857
10	基盤研究(C)	明日香 壽川	教授	パリ COP21 の結果を踏まえた各国の温室効果ガス削減目標および政策の分析評価	16K00669
11	挑戦的萌芽研究	辻森 樹	教授	キンバレー岩産E型ダイヤモンド巨晶の超高压含有物とジルコンから再生地殻物質を読む	26610163

2017年度競争的資金による研究プロジェクト

No.	研究種目	代表者氏名	職名等	研究課題名	課題番号
12	挑戦的萌芽研究	寺山 恭輔	教授	戦間期ソ連社会の軍事化に関する基礎的研究	15K12781
13	挑戦的萌芽研究	千葉 聡	教授	進化で絶滅を防ぐ	16K14804
14	若手研究(B)	高橋 陽一	助教	日本近世における旅の歴史的特質の解明	26770213
15	若手研究(B)	金 賢貞	助教	韓国地域社会における社会関係資本の生成・変化とローカリティ構築に関する実証的研究	26870037
16	若手研究(B)	山口 睦	教員研究支援者	災害支援と贈与についての人類的研究	26770298
17	若手研究(B)	KOYAMA CHRISTIAN	専門研究員	Detection of Buried Objects by Synthetic Aperture Radar Imaging for Improved Disaster Response	15K18075
18	若手研究(B)	井上 岳彦	日本学術振興会特別研究員(PD)	ロシア国内のチベット仏教徒と南・東南アジアの民族知識人に関する研究	16K20880
19	研究成果公開促進費(データベース)	工藤 純一	教授	データベース名称 越境大気汚染衛星画像データベース	16HP8027
20	特別研究員奨励費	平野 尚浩	日本学術振興会特別研究員(PD)	エスカレーション型放散仮説の検証：東アジア産陸産貝類を例として	15J01258
21	特別研究員奨励費	矢口 啓朗	日本学術振興会特別研究員(DC)	ウィーン体制に対するロシアの役割―ニコライ一世時代の会議外交への関与から―	15J05807
22	特別研究員奨励費	長谷川 雄之	日本学術振興会特別研究員(DC)	プーチン政権下の現代ロシアにおける垂直権力の構築と官僚制の変容	15J06940
23	特別研究員奨励費	齊藤 匠	日本学術振興会特別研究員(DC)	形態の変化が適応放散に至るまでの経時的進化機構の解明	16J04692
24	特別研究員奨励費	大石 侑香	日本学術振興会特別研究員(PD)	漁撈―牧畜論の構築：シベリア北方少数民族の生業複合論再考	16J06051
25	特別研究員奨励費	井上 岳彦	日本学術振興会特別研究員(PD)	ロシア帝国の仏教研究と対アジア政策の関係について	16J07002
26	特別研究員奨励費	辻森 樹	教授	超海洋パンサラッサール古テチス海インタフェイスのテクトニクス復元	16F16329
研究代表者分 小計					

※年度途中で転出又は廃止となった課題は、転出又は廃止となった年度の当初に交付決定又は基金支払を受けた額により計上している。

〈科研費以外の外部資金一覧（2016年度）〉

名称・題目		研究者	
民間等との共同研究			
1	LA-ICPMS 局所 Sr-Pb-Li-B 同位体組成分析による海洋プレートが沈み込み変成作用を被る過程の元素挙動の総合研究	辻森 樹	教授
2	電波を利用した災害に強い町づくり	佐藤 源之	教授
3	岩石中における特定の鉱物の分離法の開発	平野 直人 辻森 樹	准教授 教授
受託研究			
1	電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発	佐藤 源之	教授
2	SIP(戦略的イノベーション創造プログラム) インフラ維持管理・更新・マネジメント技術/モニタリングシステムの現場実証/地上設置型合成開口レーダおよびアレイ型イメージングレーダを用いたモニタリング	佐藤 源之	教授
3	荒砥沢ダム崩落地安全対策モニタリング事業	佐藤 源之	教授
4	「北極域研究推進プロジェクト 人文・社会科学研究分野」	高倉 浩樹	教授
5	環境研究総合推進費「小笠原諸島の自然再生における絶滅危惧種の域内域外統合的保全手法の開発」	千葉 聡	教授
受託事業			
1	北東アジア地域研究推進事業	岡 洋樹 外	教授
2	二国間国際交流事業 ロシアとの共同研究(RFBR)	鹿野 秀一	准教授 教授
寄附金			
1	上廣歴史資料科学研究部門(寄附講座)	平川 新 (兼務)	客員教授
2	一般財団法人東北開発記念財団 平成28年度(前期)海外派遣援助	山口 睦	
3	住友財団2016年度環境研究助成金	千葉 聡	

ロシアの東方から
スターリン体制の
深化・発展を考察する

中国共産党の一元支配、南北朝鮮の分断など現代の東北アジア情勢の理解には第二次大戦前の時代に遡り歴史を検証する必要がある。ソ連のスターリン体制がこの地域に及ぼした影響は、北方領土問題はいうまでもなくきわめて重大である。一方で、このスターリン体制の深化・発展は内的要因だけでは説明できない。日本による『満洲国』樹立に対抗して新疆、モンゴルの状況に深く介入していく過程についてまとめたが、これは戦後の冷戦、東欧への勢力圏拡大を理解するための先行事例として有益だろう。現在、ソ連東部における物的・人的な総動員体制の確立、中央による極東地方の集権的統治の実態について、モスクワのソ連共産党、政府、軍、外務省等の中央の公文書館、極東やシベリアの公文書館で収集する一次史料をもとに研究を進めている。



寺山 恭輔教授
てらやま ● きょうすけ
ロシア・ソ連史 日露・日ソ関係史



ソ連時代のプロパガンダポスター

- 《主な研究テーマ》
- スターリン時代を中心とするソ連政治史の研究
 - 日ソ関係の研究
 - ロシア・ソ連国境における民族政策(フィンランド、ポーランド、新疆、モンゴル)に関する研究
 - ブーチン時代の現代ロシア政治に関する研究
 - ロシア、ソ連の検閲に関する研究

北極圏先住民の狩猟牧畜適応への
環境人類学的分析と応用映像実践

ロシアを理解するためには、ユーラシア大陸北部の大半をしめるこの国家に、現在200近くの民族集団が暮らしていること、かつて中央アジア及びアラスカにまで広がる植民地を持っていた歴史を視野に入れなければならない。シベリアは、この点で現在においても内国植民地である。そこは、数多くの先住民が暮らす空間であると共に、豊富な天然資源を基盤にした経済開発が進行する地域だからである。シベリアの人類学の射程は、こうした民族・宗教問題を含めたロシアの社会文化的文脈の発掘に向けられている。と同時に、北極圏を含む厳しい環境のなかで住民が構築してきた生態学的適応の文化的側面に肉迫する。



高倉 浩樹教授
たかくら ● ひろき
社会人類学 シベリア民族誌



ロシア・ヘルマンスク山脈東麓のエヴェン人牧夫がトナカイを捕獲する

- 《主な研究テーマ》
- 北極狩猟牧畜の生態人類学的研究
 - 映像・展示を用いた公共人類学
 - スラブ・ユーラシア世界におけるナショナリズムと先住民運動
 - 北極の温暖化と地域社会
 - 環オホーツク海域の歴史人類学
 - 文化遺産と災害対応

東北アジア地域における
モンゴル遊牧民社会の歴史的研究

遊牧生産を基盤とするモンゴルの歴史的社会構成は、清代の社会・統治枠組の基盤の上に、社会主義期による近代化を経て、現在に至っている。モンゴル史において、300年近くに及ぶ清朝の支配は、近代における様々な歴史事象展開の基盤となった。従って、モンゴルの現在を理解する上で、清代は重要な意義を有する。かかる観点から、以下の研究を進めている。

- 1.モンゴルにおける前近代基層社会構造の研究。とくに清代の盟旗制度や王公制度による統治の歴史的性格の解明。
- 2.清代を中心としたモンゴルをめぐる人の移動、社会変容の様態解明。また人の移動に関わる清朝の政策展開とモンゴル社会の変容。
- 3.モンゴル史をめぐる歴史記述の研究。とくに清代から近代におけるモンゴルの歴史記述史が東北アジアの近代化と近代的歴史認識に占める位置、役割の研究。



岡 洋樹教授
おか ● ひろき
東洋史 モンゴル史

ロシア内務省による
統治機構改革に関する研究

かつては教会や村で生誕や死亡を記録したが、それが19世紀に欧州で、政府の統治機構下で、統計データとして記録される形に変わり、情報収集機構が整備される。政府統計の対象は次第に拡大し、死亡原因や伝染病の発生等もデータ収集の対象となる。近代は国民国家の時代と呼ばれるが、近代国家では統計制度という統治技術により国民の管理が進む。近隣欧州の経験に倣い、19世紀にロシアも内務省・中央統計委員会を中心に、国内の情報を一元的に集約する統治機構を整備し政府統計を刊行する。この制度は後にソ連にも継承された。ロシアの統治機構の優れていた点と限界を、諸外国と比較して明らかにする。

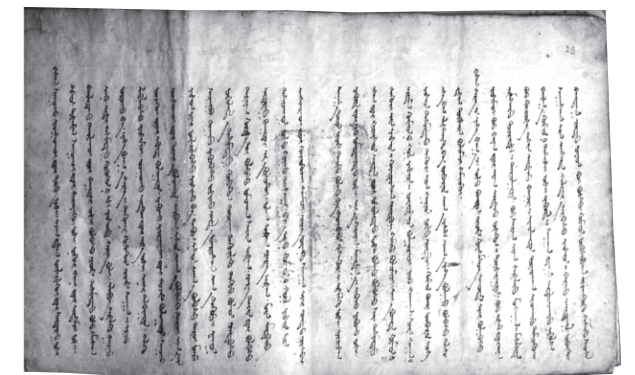


塩谷 昌史助教
しおたに ● まさちか
ロシア経済史 統治技術の歴史



初代内務大臣コチュベイ・ヴィクトル・バブロビッチ

- 《主な研究テーマ》
- ロシア内務省・中央統計委員会による統治機構の改革
 - 内務省による統治機構の国際比較



フレグジャブ布告文

- 《主な研究テーマ》
- 清代モンゴルの社会構造の研究
 - モンゴルを中心とした東北アジアの人の移動と共生の様態
 - 清代～近代モンゴルの歴史記述

中央アジア諸民族間共用語としてのロシア語の特徴と変容の研究

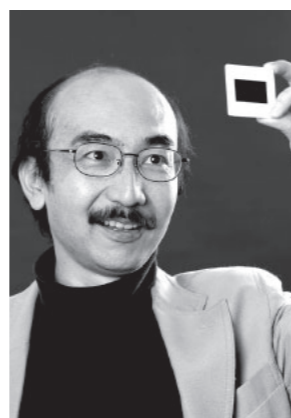
中央アジアでは様々な民族がモザイク状に住み、言語の境界と国境線は一致しない。ソ連崩壊後25年を経ても多様な民族間の唯一の共通語として機能しているのはロシア語であり、それは民族語とのコードスイッチングという文脈で用いられる。現在、脱ロシア化・民族主義化の傾向に加え経済不振による教育の貧困化によりロシア語を解さない民族語単一話者の比率が高まっているが、それは同時に言葉の通じない同国人の増加でもある。中央アジアのロシア語がこの状況下でいかなる特徴を持ち、いかに変化するのか、今後いかなる地位を得るのか、あるいは衰退して消滅に至るのかを現地調査に基づき研究している。



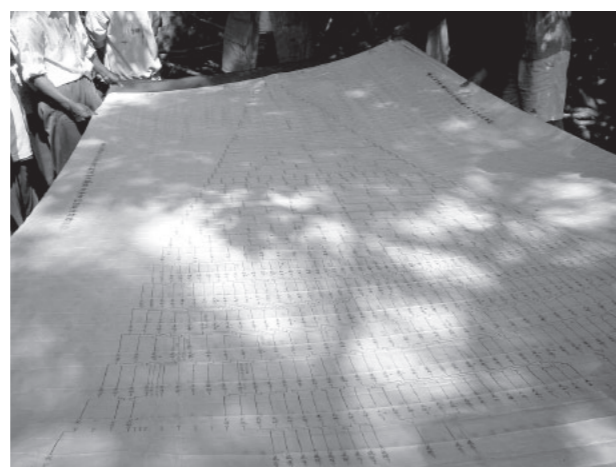
柳田 賢二准教授
やなぎだ けんじ
言語学 ロシア語学 言語接触の研究

現代中国における親族組織・宗族（そうぞく）の復興現象とそれが意味するもの

改革開放政策以降の中国南部農村に続々と復興した宗族（そうぞく）組織。父系の親族が集落をつくって集居し、ともに祖先の墓や位牌を祭る。それは一見、高度経済成長を続ける現代中国には不釣り合いなアナクロニズムにも思えるが、近年の経済発展で得た富の社会的名声への変換、文革時代に破壊された人間関係の修復、あるいは中華文明の悠久の歴史と自己の祖系を同一視しようとする愛国的思潮など、多様に現代的な意味づけを施され再解釈された宗族の姿がそこには見いだされる。こうした現代中国の隠れた一面を、現地でのフィールドワークに基づく個別具体的な事例分析から明らかにする。



瀬川 昌久教授
せがわ まさひさ
文化人類学 華南地域研究



系譜を広げる（海南省儋州市）



中国語北方方言由来の言語を話すドゥンガン人の「文化の日」。キリル字で「文化」という語が書かれている。

- 《主な研究テーマ》
- 言語接触と言語変容に関する研究
 - 多言語使用とコードスイッチングの研究
 - 現代ロシア語に関する音声学・音韻論的研究

- 《主な研究テーマ》
- 親族関係と社会組織
 - エスニシティ
 - 華南地域研究

制度設計および国際協力の側面から研究する環境問題およびエネルギー問題

環境問題およびエネルギー問題に関して、その実態および歴史的経過を解明するとともに、どのような対策が必要であり、かつ技術的・政治的に可能であるか等の問いについて総合的かつ多角的に研究を行う。特に、地球温暖化問題や越境汚染問題のような様々なステークホルダー間の合意が必要な問題に関して、環境税や排出量取引などの具体的な制度設計を中心に、諸外国および日本における具体例を参照しつつ、政治学、経済学、社会学、法哲学などの社会科学の側面から定性的・定量的に検討する。



明日香 壽川教授
あすか しゅんせん
環境政策論

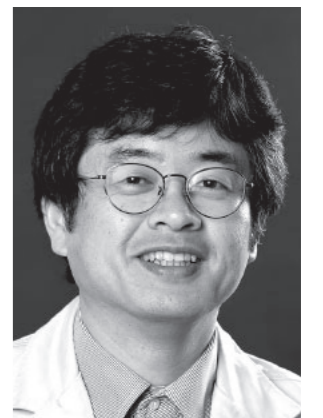


2000年オランダハーグで開催された：気候変動枠組み条約締結国会議
(Photo courtesy of Leila Mead/IISD 撮影)

- 《主な研究テーマ》
- 地球温暖化問題
 - 持続可能なエネルギー・ミックス
 - アジア諸国の環境問題およびエネルギー問題
 - 越境汚染問題
 - 国際環境協力
 - 排出量取引
 - 環境税
 - カーボン・リーケージ、企業の国際競争力
 - 国境税調査

文献考証とフィールドワークで分析する多民族国家中国の近現代

東北アジア地域にはさまざまな民族集団が存在し、広範な領土を有する中国も多民族国家という側面を持っている。帝国体制の終焉によるゆるやかな地域統合の解体から国民国家建設を通じての領域的・人的再統合に向かうという近現代中国の歴史的流れの中で、諸民族の統合は重要な問題の一つであり、また今日にいたるも依然重要性を帯びている。こうした近現代中国における民族問題について、国内外で所蔵されている文献資料の収集・分析とフィールドワークによる実態理解という手法を組み合わせることで、東北アジアの多民族社会に対する理解を一層深め、さらには東北アジアの民族共生に貢献することを目指す。



上野 稔弘准教授
うえの としひろ
中国現代史 中国民族学



復元された中国の歴史的景観（北京）

- 《主な研究テーマ》
- 中国近現代の国民国家建設過程における民族統合問題の研究
 - 中国における民族関係の形成とその変遷の研究
 - 東北アジア地域における諸民族の社会的動態とその民族的アイデンティティの研究

東北アジア地域の重要な食料である 漁業資源の国際管理を評価する

東北アジアだけでなく、海を持つ国の多くの人々は漁業資源を主なタンパク源として食している。今では、日本だけでなく、中国、台湾、韓国などが世界の主要な漁業国となっている。その漁業資源の国際管理は多くが失敗に終わっている。それは漁業資源の多くが非排他性・競合性を特徴として持ち、いわゆる「共有地の悲劇」が起こっているからである。研究テーマとしては、漁業資源の中でもとりわけ乱獲の恐れがあるマグロに焦点をあて、その「共有地の悲劇」をもたらしている交渉の要因、そして、失敗といっても、どこがどの程度失敗しているのか、といったことを明らかにしていこうと思っている。



石井 敦准教授
いしい●あつし
国際関係論 科学技術社会学



畜養された大西洋クロマグロを生簀から引き上げている(マルタ)。畜養とは、クロマグロの幼魚を捕獲して、生簀で人工的に太らせる、つまり、人工的に「全身大トロ」にする養殖の一種です。

【主な研究テーマ】

- 超学際科学
- 科学技術社会学と国際関係論の融合(外交科学)
- 炭素隔離技術の社会的側面
- 越境性酸性雨問題における国際交渉・環境協力(欧米アジア)
- 国際環境レジームにおける科学アセスメント
- 国際漁業資源ガバナンス

東北アジア地域の火山の噴火史と その影響を研究する

火山噴火が発生した場合には周辺地域に多大な災厄がもたらされる。東北アジア地域には複数の火山が存在するが、噴火が自然界(人類史)に与える影響を知るためこの地域において過去にどのような火山活動が行われてきたかを、有史後に噴火したとされる中国・北朝鮮国境上の白頭山、東北、南九州の火山を対象とした研究を行っている。特に10世紀に大陸と日本で同時期に発生した白頭山と十和田湖の2つの大規模噴火に焦点をあて、中国・北朝鮮領内及び日本国内でのフィールド調査を通じて噴火の推移や、噴火がもたらした自然界への影響(例えば環境変動)について検討し、次第に噴火の全貌が明らかになりつつある。



宮本 毅助教
みやもと●つよし
火山地質学 火山岩石学



西側山頂から見た白頭山天池カルデラ。対岸中央部に中朝国境が位置し、右が北朝鮮領。(長瀬敏郎撮影)

【主な研究テーマ】

- 白頭山10世紀巨大噴火の噴火推移の解明
- 十和田火山の噴火過程の解明
- 島弧火山(日本地域)におけるマグマ発達史
- 南三陸ジオパーク実現へ向けてのジオガイド養成プログラムの構築

東北アジア生物多様性研究

生物に多様性が生まれ維持される仕組みを理解することにより、その価値と機能を知ることができる。そして生態系の未来予測と適切な管理のための方法を開発することができる。生物多様性は現在、グローバルな環境変化、開発による生息場所の喪失、外来種の侵入などにより、急速な減少に直面しているが、特に東北アジア地域の生態系は、急速な経済発展により現在世界で最も危機にさらされている生態系である。この地域の生態系の価値を明らかにすることは、急務の課題である。東北アジア地域の生物多様性の実態を解明すること、そしてその保全に貢献することを目指して研究を進めている。



千葉 聡教授
ちば●さとし
生態学 保全生物学 進化生物学



内モンゴルでの湿地生態系調査

【主な研究テーマ】

- 島嶼生物学
- 東北アジア生態系の保全
- 多様性進化のプロセス

東北アジアの湖沼、湿地などの 水界生態系の生物群集と食物網

水界生態系では、様々な生物が食う食われる関係を介して食物網を形成している。これらの食物網は、植物・動物プランクトンやそれらを食するプラントン食性魚、さらに魚食性魚などの主要なメンバーから成り、それらについては多くの研究が行われている。一方、近年これらに加えて微生物由来の有機物を起点とする食物連鎖や、今までほとんど考慮に入れられていなかった寄生虫などを組み入れることの重要性が認識され始めている。これらのテーマを研究するため、様々な塩分環境がみられるロシア西シベリアの内陸性塩性湖沼群(チャニー湖)、ラムサール条約締結地のひとつである宮城県の伊豆沼・内沼や、海水と河川水の影響がある干潟や湿地などの水界生態系において、炭素・窒素安定同位体比の分析による食物網解析や、DNA塩基配列をもとに系統分類をすることによる微生物群集解析を行っている。



鹿野 秀一准教授
しかの●しゅういち
微生物生態学 システム生態学



チャニー湖における生物調査風景

【主な研究テーマ】

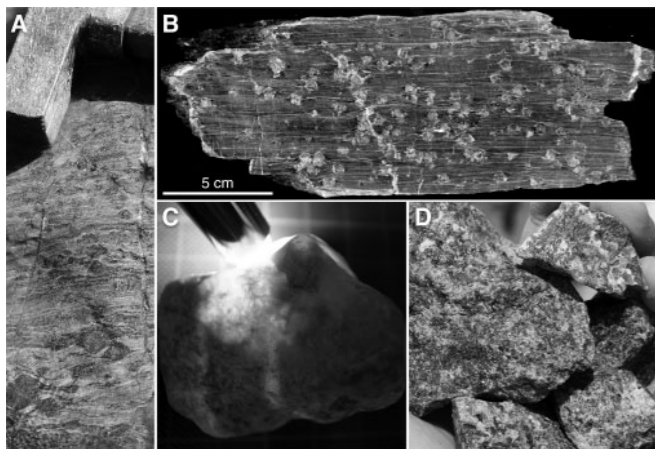
- 湖沼生態系の微生物群集
- 微生物の食物網への寄与
- 西シベリア・チャニー湖沼群の魚類を含めた食物網
- 食物網における寄生虫のリンク

プレート収束域の変成流体が関与する地学現象（鉱物間の反応～造山運動の時間・空間スケール）の包括的理解

地球史を通して、プレート収束域は大陸地殻を成長・改変させ、それと同時に地殻物質を地球深部（マントル）へ供給する物質循環拠点の役割を果たしてきた。とりわけ新原生代以降の造山帯に出現する藍閃石、ローソン石、ひすい輝石、コース石を含む高圧・超高压変成岩は、地球内部の冷却に伴ってプレート収束域の地温勾配が十分に下がった直接証拠である。東北アジアや還太平洋地域の変動帯など、過去のプレート収束域で形成した変成岩・交代岩を直接解析することは、プレート収束域の地学現象を包括的に理解する上で重要であって、惑星「地球」の未来予想という視点においても地球惑星科学の挑戦である。



辻森 樹教授
つじもり●たつき
地質学 変成岩岩石学



A) ローソン石エクロジャイト、B) ざくろ石青色片岩、C) ひすい輝石岩、D) 宝石質コランダム(ルビー)

《主な研究テーマ》

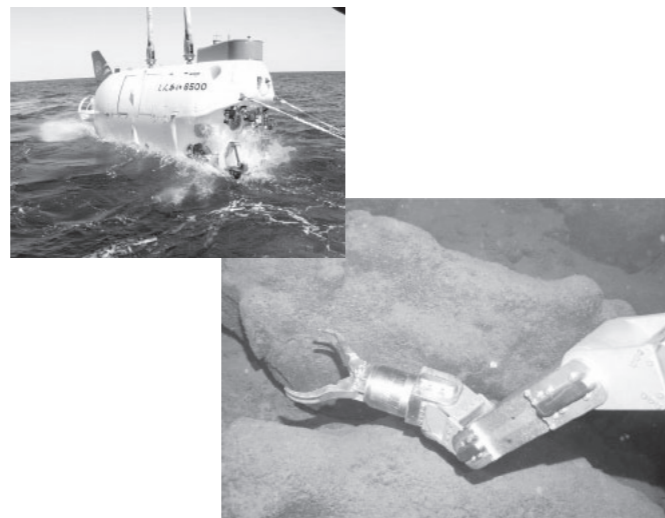
- プレート収束域の変成流体の役割の理解
- 原生代～顕生代の造山運動と地球変動史
- 東北アジアの高圧・超高压変成帯のテクトニクス
- 変成岩研究の体系化、日本列島地質構造発達史の体系化
- 硬玉翡翠(ひすい輝石岩)の文理融合型総合研究の創成

新種の火山・プチスポットの成因と地球の二酸化炭素放出量

沈み込む海洋プレートの屈曲場で活動し、2006年に三陸沖で発見された新種の火山(プチスポット)は、近年チリ沖や西太平洋の深海底でも続々と見いだされている。このような深海底は、古いプレートで構成されているため、これまでは火山活動が起こり得ない場所と考えられていた場所である。同火山は、カムチャツカ沖、日本海、極東ロシアなどにも存在している可能性があり、それらの噴出物から放出される成分によっては、地球の二酸化炭素放出量をも再考する必要がある。また、過去の海洋底が現在陸上に露出する場所(根室、歯舞、サハリンなど)の調査も進めている。



平野 直人准教授
ひらの●なおと
海洋底科学 テクトニクス 地質年代学



潜水調査船「しんかい6500」と、岩石試料採取の様子。(海洋研究開発機構、米科学振興協会提供)

《主な研究テーマ》

- 海底火山および付加体中の火山岩の成因解明
- 新種の火山・プチスポットの二酸化炭素放出量
- 新種の火山・プチスポットの世界的普遍性
- 西太平洋プレート上の火山群の形成史

火山噴火の特徴を決める要因を
実験や観測をもとに研究する

日本やカムチャツカをはじめ、東北アジア地域には多くの活火山が存在する。火山噴火の特徴はマグマの性質に大きく左右される一方で、同じようなマグマで異なるタイプの噴火が起こったり、さらには同じ火山で時間とともに噴火の様子が変化するなど、その個性が何に支配されているかは必ずしも明らかでない。この謎を解明するために、マグマの物理的性質の測定や、噴火を模擬した実験、また実際の火山で噴火の観測を行っている。得られた結果は、噴火様式と周囲への影響の関係を明らかにし、日本のような人口密集地域での防災に役立つと期待されている。



後藤 章夫助教
ごとう●あきお
火山物理学 マグマ物性



北海道有珠火山金山比羅山火口で発生した、ジェットを伴う水蒸気爆発

《主な研究テーマ》

- マグマの物理的性質の測定
- 火山爆発模擬実験
- 空振観測

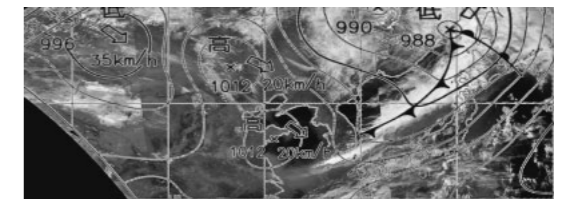
人工衛星を使って
ロシア極東・シベリアの
環境問題を解明

地球温暖化の原因とされている二酸化炭素を大規模森林火災の管理により大幅に削減する構想をロシアの森林火災を事例として、火災の早期発見方法の開発を行っている。一方では、PM2.5を含む越境大気汚染や黄砂の実態を可視化し、その影響を評価する方法の開発を行っている。いずれも、人工衛星からのデータを直接受信し、問題解決のアルゴリズムを開発する研究であり、モスクワ大学と緊密に連携を取りながら行っている。

図1の事例(2013年4月14-15日)は、大陸の低気圧で黄砂が発生して、そのまま移動。その前に高気圧があり、そこに汚染物質があるので、黄砂は汚染物質に取り込まれ、その汚染物質が日本に向かって動き始めている様子が大変よく分かる。



工藤 純一教授
くどう●じゅんいち
環境情報学 デジタル画像理解学



Aqua-MODISによる (2013.04.14)

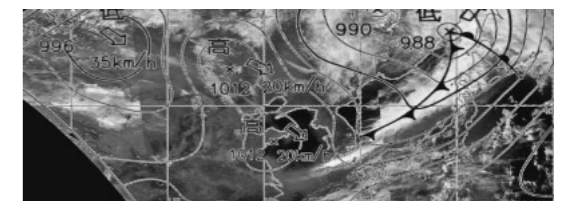


図1: Aqua-MODISによる (2013.04.15)

《主な研究テーマ》

- 大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想
- IKONOS衛星画像の融合処理に関する研究
- 大規模画像データベース構築に関する研究
- PM2.5を含む越境大気汚染や黄砂の衛星画像可視化研究

電波科学による
防災・減災と環境保全

電波を利用した地球観測には衛星・航空機合成開口レーダー(SAR)や地表測定用中レーダー(GPR)など多様なレーダー装置が利用されている。私達は電波で地中を視るGPRと衛星から観測するSARを組み合わせて、環境保全を目的として地下水や土壌水分を計測する研究をモンゴル、ロシア、中国、韓国などの東北アジア地域を対象に行ってきた。一方、最先端GPR技術を利用して我々が開発したALIS(エーリス)はカンボジアで80個以上の地雷を除去する成果をあげている。国内では地表設置型合成開口レーダー(GB-SAR)による地滑りモニタリングを地震で被災した栗原市、南阿蘇村で実施している。また津波被災者捜索、復興関連の遺跡調査へのGPR技術の供与など、電波科学による積極的な防災・減災への取り組みを続けている。またレーダーによる社会インフラや建物の安全性評価を進めている。



佐藤 源之教授
さとう●もとゆき
電磁波応用工学 地下電磁計測



GPRによる地下水計測
(モンゴル・トール川流域)



カンボジア地雷原で活躍するALIS



GPRによる遺跡計測
(埼玉県・さきたま古墳)

- 《主な研究テーマ》
- カンボジア地雷除去
 - GPRによる遺跡調査、震災復興支援
 - GB-SARによる地滑りモニタリング
 - SARとGPRを組み合わせた地下水・土壌水分計測

地表設置型合成開口レーダ (GB-SAR)と地中レーダ(GPR)による地中・建築物の内部イメージングの研究

電波を利用した地表設置型合成開口レーダ(GB-SAR)と地中レーダ(GPR)の研究を行っている。これらのレーダを建造物の壁や空港の舗装体に対して用いることで、非破壊で内部の損傷を発見することができる。また、地面に向けて用いる地雷探知では、地雷形状が可視化され、従来手法より効率的な地雷発見が可能となる。より正確な情報を得るために、レーダ用アンテナの設計開発、受信信号の偏波校正や、観測機器を走査する際の位置認識精度の向上を行う。これらの手法を測定対象に応じて適用することで、高精度なイメージング手法を開発する。



菊田 和孝助教
きくた●かずたか
計測工学



地表設置型合成開口レーダ(GB-SAR)システム。壁に設置し、走査することで破損箇所を特定できる。



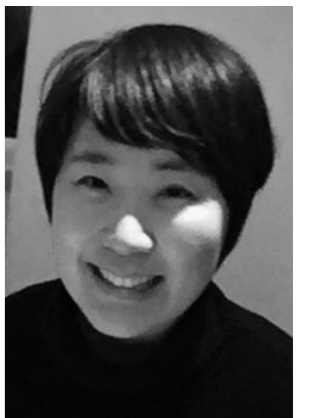
アレイ型地中レーダ(GPR)“やくも”。空港の舗装体内部の劣化箇所などを特定できる。

- 《主な研究テーマ》
- GB-SARによる災害時の建造物検査
 - GPRによる地雷探知
 - GB-SARとGPRを組み合わせた空港滑走路モニタリング

中国共産党の一党体制下における
人民法院の政治制度としての役割

中国の司法機関である人民法院は、独立して司法決定を出すことができず、中国共産党に從属的な機関であると位置づけられてきた。このような中国共産党と人民法院の権力関係に変化はないものの、1980年代以降、人民法院は紛争処理の役割を担い、また、行政機関の監督機能を付与されるなど、その重要性は増している。

中国共産党は人民法院をどのように機能させようとしてきたのか、そしてその結果、両者の権力関係はどのように変容したのであろうか。私の研究は、中国における政党と司法の権力関係を事例に、権威主義体制における司法機関の政治制度としての機能と権威主義体制が持続するメカニズムを明らかにしようとするものである。



内藤 寛子助教
ないとう●ひろこ
現代中国政治 比較政治



中国は民主化するのか?



いよいよ裁判が始まる。裁判所に五星(中国共産党の印)が光る。



北京税関にて。台湾人、香港人、全てが中国人と化する。

東北アジア地域の環境変化
モニタリングのための
電磁波を利用した
リモートセンシング技術の開発

私は東北アジア地域の環境変化をモニタリングするために、電磁波を利用したリモートセンシング技術の開発に興味を持って取り組んでいます。広大な空間を観測対象として、いかに迅速かつ高精度な計測を行うかについて、数値シミュレーションと実際のデータを利用し新しいアルゴリズムを開発しています。また、地上設置型合成開口レーダ(GB-SAR)に関して、基礎技術から実際の現場計測に至るまでの全体にわたるシステム設計、とデータ解析に取り組んでいます。更に地中レーダも利用しながら環境計測のためのリモートセンシング技術の実用化を進めます。



鄒 立龍助教
ソウ●リーロン
計測工学



宮城県栗原市荒砥沢で東北大学が運用しているGB-SAR(地表設置型合成開口レーダ)



アレイ型地中レーダ(GPR)と高精度3次元GPR技術を利用した「やくも」による計測

- 《主な研究テーマ》
- 環境モニタリングアプリケーションのための偏波利用した地上設置型合成開口レーダ
 - 近距離およびマルチスタティック SAR 画像化アルゴリズム
 - 地中レーダーシステムとその応用及び分析方法

- 《主な研究テーマ》
- 権威主義体制が持続するメカニズム
 - 中国共産党と人民法院(司法機関)の権力関係
 - 権威主義体制における司法機関の政治制度としての役割



近世日本列島の 経済交流を明らかにする

私は、18世紀から19世紀にかけての日本経済の歴史について研究をしている。研究方法は、当時の文献資料(「古文書」)の内容を具体的に分析することから始まる。また、文献だけではなく、フィールドワークやインタビューも含めて、豊かな歴史像の構築を目指している。現在は、①経済都市大阪がどのような歴史的経過を歩んでいくのか、②日本海航路を利用した商業活動(北前船)について、③宮城県の地域史分析、の3点を中心に取り組んでいる。日本列島のさまざまな地域が経済的につながっていたことを実証し、当時の人々のありようを考察する。これらをもとに、新しいアジアの経済史を描きたい。



荒武 賢一朗准教授
あらたけけんいちろう
日本近世史 経済史 都市史



江戸時代の「客船帳」
(山形県立博物館)



江戸時代の商家(静岡県湖西市)

《主な研究テーマ》

- 近世都市をみる視点
- 沿岸社会と経済交流の歴史
- 日本列島市場論の提起と近世流通市場

日本近世旅行史の研究 —「人の移動」の観点から社会をみる—

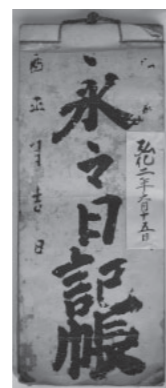
日本において、身分階層を問わず人々が各地を旅することができるようになったのは、近世(江戸時代)からであると言われる。徒歩による数ヶ月に及ぶ移動、関所・番所や山間部・海岸部の険阻な難所の通行、雄大な自然景観との邂逅。こうした現代にはみられない旅の特徴的な諸要素について、紀行文や道中日記といった記録を解析し、近世の旅の歴史的特質に迫る。また、代表的な旅先の1つである温泉に残る古文書の分析から、地域住民による旅行者への対応や温泉の資源的活用の特質を解明する。この2つの作業を基軸に、旅や人の移動といった観点から日本社会の展開を捉え直したい。



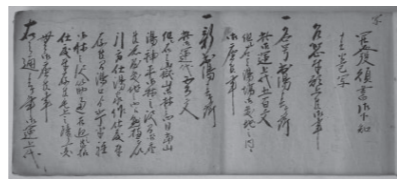
高橋 陽一助教
たかはしりょういち
日本近世史 旅行史



旅行者が書き残した挿絵入りの紀行文
(『陸奥紀行』東北大学附属図書館)

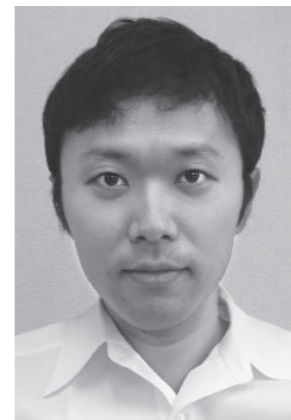


地域に残る古文書
(宮城県柴田郡川崎町青根温泉 佐藤家文書)

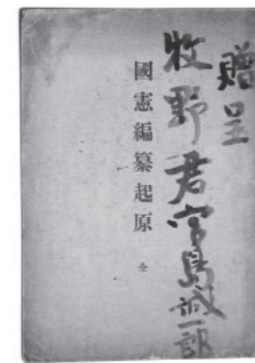


米沢藩出身の中堅官僚から 近代の東北・日本・東アジアを とらえなおす。

宮島誠一郎(1838~1911)は、幕末、米沢藩の周旋方として情報収集や他藩との折衝に当たり、維新後は「朝敵藩」出身であるにもかかわらず明治政府に登用された。明治5年(1872)に宮島が起草した「立国憲議」は先駆的な立憲政体論として知られる。戊辰戦争は彼にとっていかなる意味を持つ経験だったのか。敗戦を経て、いかにその国家構想を紡いだのか。ここに宮島を追う私の旅がはじまった。また、ロシアへ警戒心を抱き続けた宮島は、清国公使と交わりを深め日清両国の融和にも尽力した。両国の対立に翻弄される宮島の姿は、激動の東アジア情勢を映し出す。宮島は19~20世紀の東アジアへと私を誘おうとしている。



友田 昌宏助教
ともだまさひろ
日本近代政治史



宮島誠一郎が編纂した『国憲編纂起原』(元眞社、1905年)。左院時代の彼の活躍が垣間見られる



左院時代の宮島誠一郎

《主な研究テーマ》

- 東北からみた明治維新
- 旧藩意識と近代の国家・地域
- 19~20世紀の東アジア情勢と日本における興亜論の展開
- 日本における近代国家形成と漢学者



中国・北京の街角



各種研究員の研究

教育研究支援者

田中 利和 たなか●としかず
生態人類学

エチオピアの牛耕に関する人類学的研究と地下足袋文化の創造を目指す実践的地域研究をおこなっています。

宮後 裕充 みやじり●ひろみつ
環境政策論

日本の越境大気汚染政策と科学の関係を、東アジアの越境酸性雨問題を事例に明らかにしようと研究している。

李 善姬 イ●ソンヒ
ジェンダー人類学

日本と韓国におけるジェンダーとコミュニティ研究。近年は、結婚移住女性と日韓の「多文化共生」の研究を遂行中。

客員研究支援者

金丹 ジン●タン
環境経済学

研究紹介：都市環境汚染問題と財・サービスの貿易を通じた環境負荷の国際的相互依存関係について研究を行っている。

デレーニ アリーン

DELANEY Alyne
Cultural Anthropology; social impact assessment

My current study investigates how fishers' local knowledge can be used in disaster risk reduction for policy makers. This builds upon earlier work which looked into how fishers' (and noriyasan) lives and workways have changed in the post-3.11 era compared to pre-3.11

研究支援者

木村 一貴 きむら●かずたか
進化生態学

種の多様性の創出・維持メカニズムの解明や、固有種・外来種を巡る生態系保全に関わる研究を行っている。

平野 尚浩 ひらの●たかひろ
進化生態学

主に東アジアの陸・淡水産貝類を例に、種分化・表現型の多様化について研究をしている。

日本学術振興会特別研究員

井上 岳彦 いのうえ●たけひこ
歴史学

ロシアの仏教徒の歴史と現在を考察することで、キリスト教国家におけるアジア系住民の共生のあり方を探求する。

大石 侑香 おおいし●ゆか
社会人類学

西シベリアの北方少数民族の生業複合や環境利用について研究しています。

齊藤 匠 さいとう●たくみ
進化生物学

研究紹介：湖沼や水田などに普通に見られる淡水産貝類を用いて、なぜそこにそのような形の生物が存在しているのかを総合的に研究しています。

内田 翔太 うちだ●しょうた
保全生物学

私の研究テーマは最も絶滅率の高い分類群の1つである陸産貝類に対する様々な外来種の影響を明らかにすることです。

日本学術振興会外国人特別研究員

ポストルガラン ダニエル

PASTOR-GALAN Daniel
Plate tectonics, kinematics, paleogeography and deformation in the lithosphere

Through a multidisciplinary study, including Earth structure, paleomagnetism, geochronology, isotope geology and modeling, I try to reconstruct the evolution of tectonics plates, how they moved in the past and the consequences of that tectonic movements, especially in the long term evolution of the inner Earth. My favorite topics are the formation and disruption of supercontinents, like Pangea and the tectonic causes forming curved orogens.

ダライヤン ビャンバー

DALAIBUYAN Byambajav
Development studies, extractive industries

My current research examines the impacts of global minerals use dynamics on local sustainable development challenges in resource-dependent countries.

リサーチ・アシスタント

城所 喬男 きどころ●たかお

日本思想史
近世神道思想

『東北アジア研究』

第21号 (2017) 目次

- 論文
「外圧」が捉えた新潟における通商司政策 / 青柳正俊
ヨーロッパ協調とニコライ一世の外交政策—ベルギー独立問題への対応から / 矢口啓朗
蒙文ガンジュール木版本『賢愚経』における名詞の曲用語尾の特徴 / オヨンガ
『満文原槍』所収モンゴル語文書の文法的特徴について / 海蘭
- 研究ノート
Waves of Change: Adaptation and Innovation among Japanese Fisheries Cooperative Members in the post-3.11 era / DELANEY, Alyne Elizabeth
- 書評
荒武賢一郎編『世界とつなぐ 起点としての日本列島史』 / 高槻泰郎
小林延人 著『明治維新期の貨幣経済』 / 荒武賢一郎

『東北アジア研究センター叢書』

- 第57号 蒙漢字典—モンゴル語ローマ字転写配列— (栗林 均編、2016)
- 第58号 モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費 (風戸 真理・尾崎 孝宏・高倉 浩樹編、2016)
- 第59号 土族語・漢語統合辞典 (栗林 均編、2016)
- 第60号 『東郷語詞彙』『新編東部裕固語詞彙』蒙古文語索引 (栗林 均編、2017)
- 第61号 オイラート文語三種統合辞典 (栗林 均編、2017)

『東北アジア研究センター報告』

- 第21号 『西藏歴史檔案叢刊』所収パスパ文字文書 (栗林 均・松川 節編、2016)
- 第22号 ユーラシアの遊牧 歴史・文化・環境 (サンピルドンドヴ・チョローン・胡 日查・アンドリアン ボリソフ・岡 洋樹編、2016)
- 第23号 旧陸奥中村藩山中郷基本資料 (若本 由輝・多田 宏・佐藤 大介・泉田 邦彦・高倉 浩樹編、2016)

『東北アジア学術読本』

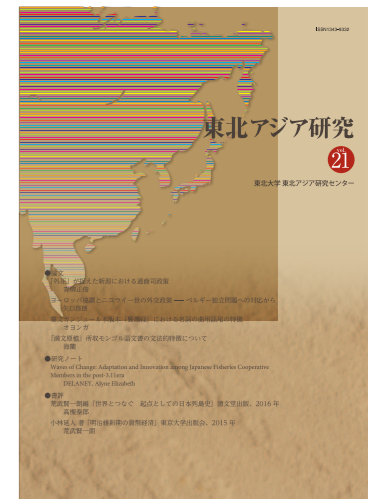
- 第4号 『食と儀礼をめぐる地球の旅：先住民文化からみたシベリアとアメリカ』 (高倉 浩樹・山口 未花子編、東北大学出版会、2014)
- 第5号 世界遺産を学ぶ—日本の文化遺産から— (入間田 宣夫・仲野 義文・荒武 賢一郎著、東北大学出版会、2015)

『東北アジア研究専書』

- 第11号 世界とつなぐ 起点としての日本列島史 (荒武 賢一郎著、清文堂出版株式会社、2016)
- 第12号 東北からみえる近世・近現代 (荒武 賢一郎著、有限会社岩田書院、2016)
- 第13号 「宗教」と「無宗教」の近代南島史—国民国家・学知・民衆— (及川 高著、森話社、2016)
- 第14号 僑郷—華僑のふるさとをめぐる表象と実像 (川口 幸大、稲澤 努編、行路社、2016)
- 第15号 東北の近代と自由民権—「白河以北」を越えて— (友田 昌宏編著、日本経済評論社、2017)
- 第16号 食をめぐる人類学—飲食実践が紡ぐ社会関係 (櫻田 涼子、稲澤 努、三浦 哲也編、昭和堂、2017)
- 第17号 ソ連と東アジアの国際政治 1919-1941 (麻田 雅文編、みすず書房、2017)
- 第18号 旅と交流にみる近世社会 (高橋 陽一編著、清文堂出版株式会社、2017)
- 第19号 スターリンとモンゴル：1931-1946 (寺山 恭輔著、みすず書房、2017)

その他の関連著書

- 稲澤 努『消え去る差異、生み出される差異』—中国水上居民の エスニシティー— (東北大学出版会、2016)
- 瀬川 昌久・川口 幸大『〈宗族〉と中国社会』—その変貌と人類学的研究の現在— (風響社、2016)
- 高橋 陽一『近世旅行史の研究』—信仰・観光の旅と 旅先地域・温泉— (清文堂出版、2016)





東北アジア研究センター創設 20周年 記念式典・講演会・国際シンポジウム

1996年に創設された東北アジア研究センターは、今年20周年の節目を迎えた。その記念行事として、創設20周年記念式典・シンポジウムを2015年12月5日(土)・6日(日)の2日間にわたり、仙台国際センターにて開催した。5日の記念式典は東北アジア研究センター 岡洋樹センター長による開式の挨拶で幕を開け、東北大学 里見進総長(代理:伊藤貞嘉研究担当理事)及び文部科学省 牛尾則文研究振興局学術機関課長、人間文化研究機構 立本成文機構長、モンゴル科学アカデミー歴史研究所 S.チョローン所長、北東アジア研究交流ネットワーク 谷口誠代表幹事(代理:千葉康弘副代表幹事)より、祝辞をいただいた。

続いて記念講演会が開催され、山室信一(京都大学人文科学研究所教授)と篠田謙一(国立科学博物館人類研究部 研究調整役)の両氏から、それぞれの専門分野のお立場から東北アジアをテーマとするご講演をいただいた。聴衆は学内外から300名を超えた。

両日にわたって開催された記念国際シンポジウム「東北アジア:地域研究の新たなパラダイム」では、「東北アジアの自然環境:自然史」、「東北アジアの社会環境:越境」、「東北アジアにおける遺産の保全と継承」と題して、計12のセッションが実施されたほか、東北アジア研究の意義と将来像を模索する総合セッションが設けられた。各セッション会場では、国内外の招聘者による意欲的な発表、活発なディスカッションがなされた。

また、関連企画として、10月24日・25日には「ワークショップ・地震災害後の人文学プロジェクトの回顧と研究者の役割の探求」、11月23日・24日には「Korea-Japan Joint Conference on Electromagnetic Theory, Electromagnetic Compatibility and Biological Effect (KJJC 2015)」、11月26日・27日には「電子情報通信学会:地下電磁計測ワークショップ」を開催した。

いずれのイベントにおいても、非常に多くの方にご来場いただき、有意義で盛大な20周年事業となった。



記念式典

記念講演

講演1: 山室信一氏(京都大学人文科学研究所教授) 思想課題としての東北アジア

講演2: 篠田謙一氏(国立科学博物館人類研究部 研究調整役)

DNA から見た日本人の形成と北東アジア

総合セッション: 東北アジア研究の意義と将来像

《セッション概要》

東北アジアの自然環境: 自然史

セッションA1: 東北アジアの地殻変動—パンサラッサから環太平洋まで

セッションA2: 東北アジア生物多様性の起源

セッションA3: 東北アジアの人類誌と環境適応

東北アジアの社会環境: 越境

セッションB1: 個人史からみる東北アジアの人の移動—マルチサイトな人類学の挑戦

セッションB2: 近現代における東アジアの移住者の生活実践—マルチサイトな人類学の挑戦II

セッションB3: 東アジアの環境問題をめぐる国際協力: その到達点と課題、そして未来

セッションB4: モンゴル史及び東北アジア史における大清国の歴史的 position

セッションB5: 東北アジアにおける戦後秩序の形成

東北アジアにおける遺産の保全と継承

セッションC1: 東北アジアの言語資料の電子化利用

セッションC2: 歴史資料の保全と活用—19世紀日本の村落社会と生命維持

セッションC3: 西シベリアの湿地生態系の食物網と寄生関係

セッションC4: 狩野文庫の特徴について—明治の博物学者狩野亨吉の視点

関連企画

ワークショップ・地震災害後の人文学プロジェクトの回顧と研究者の役割の探求

日時: 2015年10月24日(土) — 10月25日(日)

場所: 東北大学東京分室

Korea-Japan Joint Conference on Electromagnetic Theory, Electromagnetic Compatibility and Biological Effect (KJJC 2015)

日時: 2015年11月23日(月) — 11月24日(火)

場所: 仙台国際センター

電子情報通信学会 地下電磁計測ワークショップ

日時: 2015年11月26日(木) — 11月27日(金)

場所: 東北大学片平キャンパス片平さくらホール2階



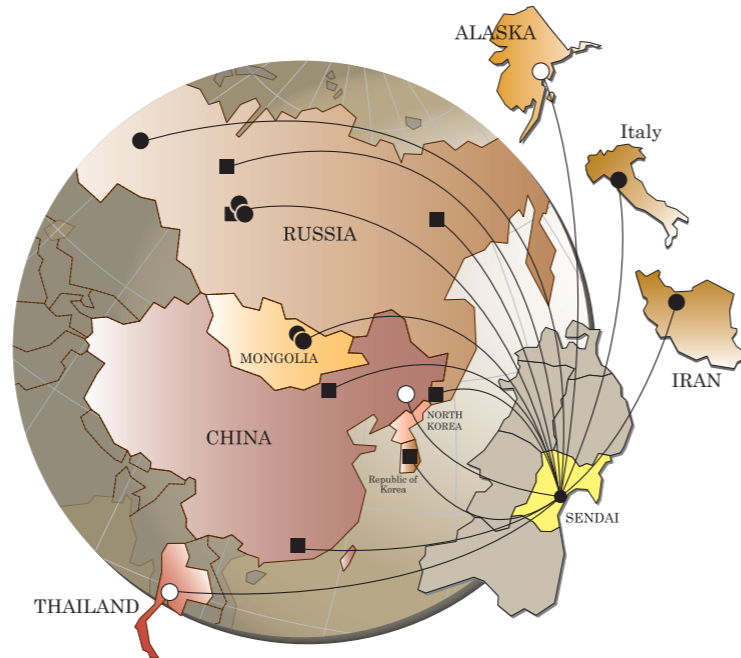
国際学術交流

[学術協定による海外の学術機関等との連携強化]

大学間協定および部局間協定

締結年月日	相手方機関名
1992. 8.10	● ロシア科学アカデミーシベリア支部
1999. 1.12	○ アメリカラスカ大学
2000. 8.21	● モンゴル科学アカデミー
2000.10. 2	● モンゴル科学技術大学ジオサイエンスセンター
2001. 3. 1	● 中国吉林大学
2001. 6.25	■ 中国広東省民族宗教研究院
2001.11.16	● モンゴル科学技術大学
2002.10. 1	■ ロシア科学アカデミー・シベリア支部 V.N.スカチョフ森林研究所
2003. 7. 4	● ロシア連邦ノボシビルスク国立大学
2005. 9. 1	■ ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所
2008. 4. 1	■ 中国内モンゴル師範大学蒙古学学院
2008. 4.25	■ 韓国高麗大学校中国学研究所
2008. 4.25	■ 韓国高麗大学校日本研究センター
2008. 9.22	■ 中国内モンゴル師範大学蒙古学学院
2009. 8.21	● イタリアフィレンツェ大学
2009. 8.25	○ イランテヘラン大学
2009. 9.30	■ ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・ 北方民族問題研究所
2011. 9.28	■ 中国内モンゴル師範大学旅游学院
2013. 3. 1	○ ドイツ ドイツ航空宇宙センター
2014. 2.25	■ 中国 中央民族大学蒙古语言文学系
2014. 9.30	○ ロシア連邦 ロシア国立高等経済学院
2016. 4. 1	■ ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部 人文学・北方民族問題研究所(学生交流に関する覚書)
2016. 8.15	■ ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部 ヴィノグラードフ記念地球化学研究所

●:センターが世話部局となった大学間協定 ○:センターが協力部局となった大学間協定 ■:部局間協定



ロシアとの交流

東北アジア研究センターは、ロシアの研究教育機関とさまざまな学術交流を進めている。そのうちノボシビルスク国立大学と本学が2003年に締結した大学間学術交流協定では世話部局をつとめている。交流活動の一つとして、本学ロシア交流推進室や文系諸部局教員の協力を得て、2009年から同大文学部東洋学科で日本アジア講座を開催してきた。これは、同大で日本語・日本文化を学ぶ学部生・大学院生を対象に、日本・アジアを専門とする本学教員が日本語で講義を行うものである。また2013年度から仙台で実施している研究交流会「日露ワークショップ」では、両校の教員による講演と、大学院生による研究発表が英語で行われ、学生に国際交流の機会を提供している。本センターが様々な場面で協力を進めるロシアの研究教育機関は、主要なパートナーとなっている。



ノボシビルスク大学新校舎

日本アジア講座(2015年)

[研究者の国際交流]

年度別	外国人研究者の招聘・研究者の海外派遣 (延べ人数)						
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
外国人研究者の招聘	30	10	15	13	26	33	32
研究者の海外派遣	69	70	78	87	78	76	77

[国際シンポジウム等の主催・参加状況]

年度別	国際シンポジウム等の主催・参加状況 (単位:件)						
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
主催件数	1	2	2	6	11	10	14
参加件数	29	30	36	39	41	47	43

社会との連携

[公開プログラム]

2016年度公開講演会

北東アジアの環境：文化的認識と政策的関与

毎年恒例となっている東北アジア研究センター公開講演会が、2016年12月4日(土)に、東北大学川内北キャンパスマルチメディア棟6階大ホールにて開催された。今回の講演会は「北東アジアの環境：文化的認識と政策的関与」と題し、講師として千葉大学名誉教授の荻原眞子先生と国立環境研究所地球環境センター気候変動リスク評価研究室室長の江守正多先生をお招きし、荻原先生からは「狩猟民世界からのメッセージ-自然界のなかの人間存在」、江守先生からは「地球温暖化と私たちの未来」と題して講演をいただいた。

荻原先生からは極東アムールの狩猟民族やアイヌの生活文化を事例として、人間とそれを取り巻く自然との関わりかたについて、特に人間と熊の関係をめぐる様々な説話伝承や習俗の事例を通じて、自然に対する様々な考え方の形成について講演を行っていただいた。

江守先生からは地球温暖化の現状と将来の予測およびリスクについて、未来のニュース番組をイメージしたシミュレーション映像や詳細なデータを交えつつ、着実に進行する地球温暖化の状況がわかりやすく示され、また国際的な環境問題への取り組みが一層本格化している昨今の情勢をふまえ、我々は地球温暖化をはじめとする環境問題にどのように取り組むべきかについて講演を行っていただいた。

両先生の講演内容は人間と環境の問題を異なるアプローチで語るもので、人間の生活自体を脅かす迄になった環境問題の切実さを認識するとともに、これまで人間が抱いてきた自然との関わり方についての考え方を改めて評価するものとなった。

当日は冬空の中多数の市民の皆さんが来場された。さらに今回は前日より人間文化研究機構と本センターとの合同で開催されていた国際シンポジウムとあわせて来場された方もおり、講演会は盛況のなか講演後の質疑も活発に行われるなど大きな盛り上がりを見せた。



2016年度シンポジウム・上廣歴史資料学研究部門開設5周年記念

歴史資料学と地域史研究

東北アジア研究センターシンポジウムは2017年2月11日・12日に開催したが、その2日目は、「歴史資料学と地域史研究」をテーマとして、平川新(宮城学院女子大学学長、センター上廣歴史資料学研究部門・部門長)、フィリップ・ブラウン(オハイオ州立大学教授)、デビッド・ハウエル(ハーバード大学教授)、河西英通(広島大学教授)、上山眞知子(山形大学教授)の各氏にご講演をいただいた。いずれも多方面で活躍される人文社会学の専門家であり、それぞれが取り組んでおられる研究成果を披露されつつ、今回のテーマを意識しながら参加者に新しい知見を提供された。ここで基本となるのは、歴史資料が地域に伝来し、それがどのように活用され、未来へと継承されるのかという論点である。もちろん歴史を扱う以上、その内実を詳しく論じることが重要であるが、歴史資料が持つ有益性はそれにとどまらない。たとえば、ブラウン氏の発見された加賀国(現石川県)で独自に展開する江戸時代の土地制度と、上山氏が心理学者の立場から接した歴史資料保全活動と地域の人々については、一見すると専門領域が異なる話である。しかし視野を広げてみれば、地域社会や生活文化というキーワードで密接に絡み合うもので、古今を問わず日本列島における人々の営みを考えることが可能になる。

後半のパネルディスカッションではフロアから講師への質問を含みながら、佐藤大介氏(東北大学災害科学国際研究所准教授)の進行によって今後歴史資料学が果たすべき課題などについて忌憚のない意見交換がおこなわれた。この2日間の開催で合計300名の来場があり、学術的価値のみならず、社会にも広くセンターの活動が紹介できたように感じている。





データ編

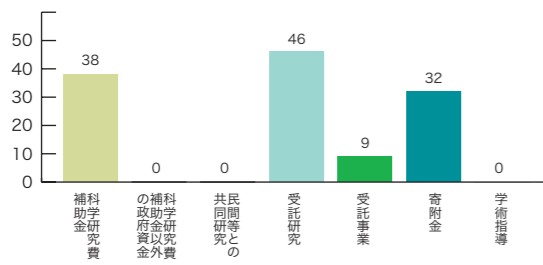
(2017年7月現在)

・職員数(現員)	教授9名、准教授6名、助教8名、計23名	・施設面積	2,843 m ²
・図書室	蔵書数概算 22,000冊 受入雑誌数 和雑誌 286種 洋雑誌 86種		

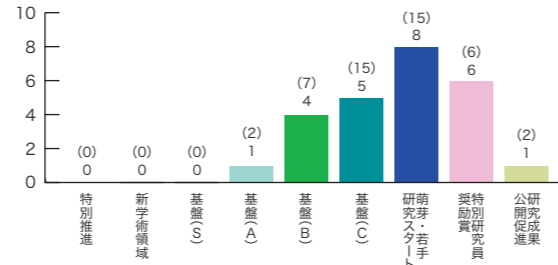
[競争的資金獲得件数および採択額]

○2016年度 計 125 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)

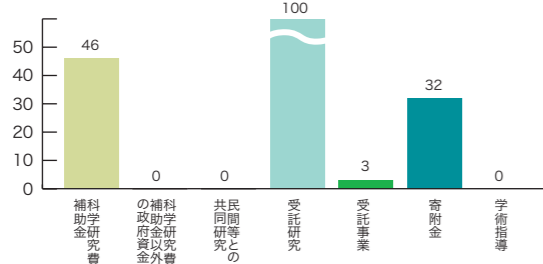


○科研費種目別(申請)採択数合計

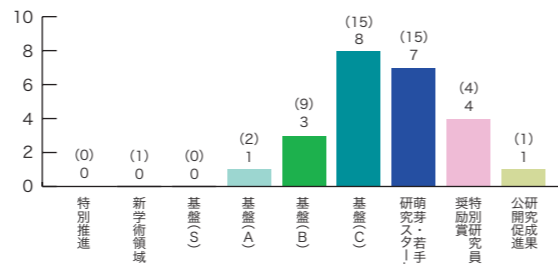


○2015年度 計 181 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)

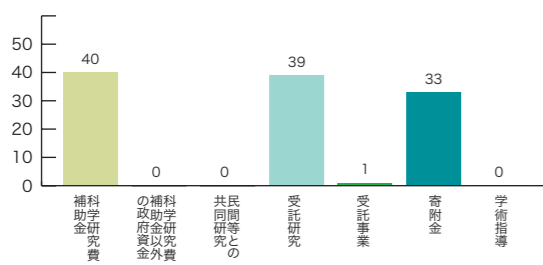


○科研費種目別(申請)採択数合計

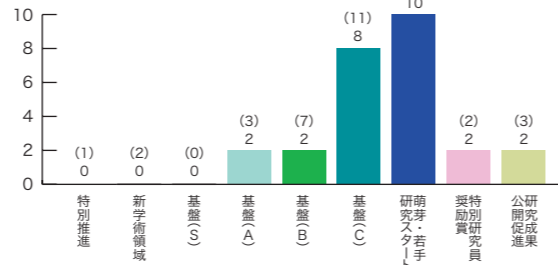


○2014年度 計 113 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)

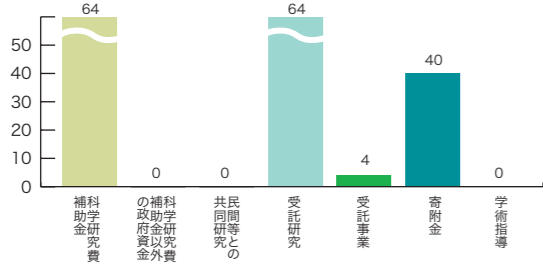


○科研費種目別(申請)採択数合計

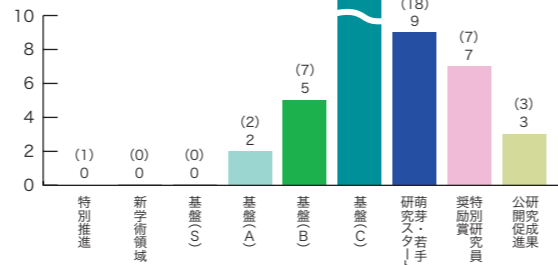


○2013年度 計 172 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)



○科研費種目別(申請)採択数合計



[部局別大学院生の受入状況]

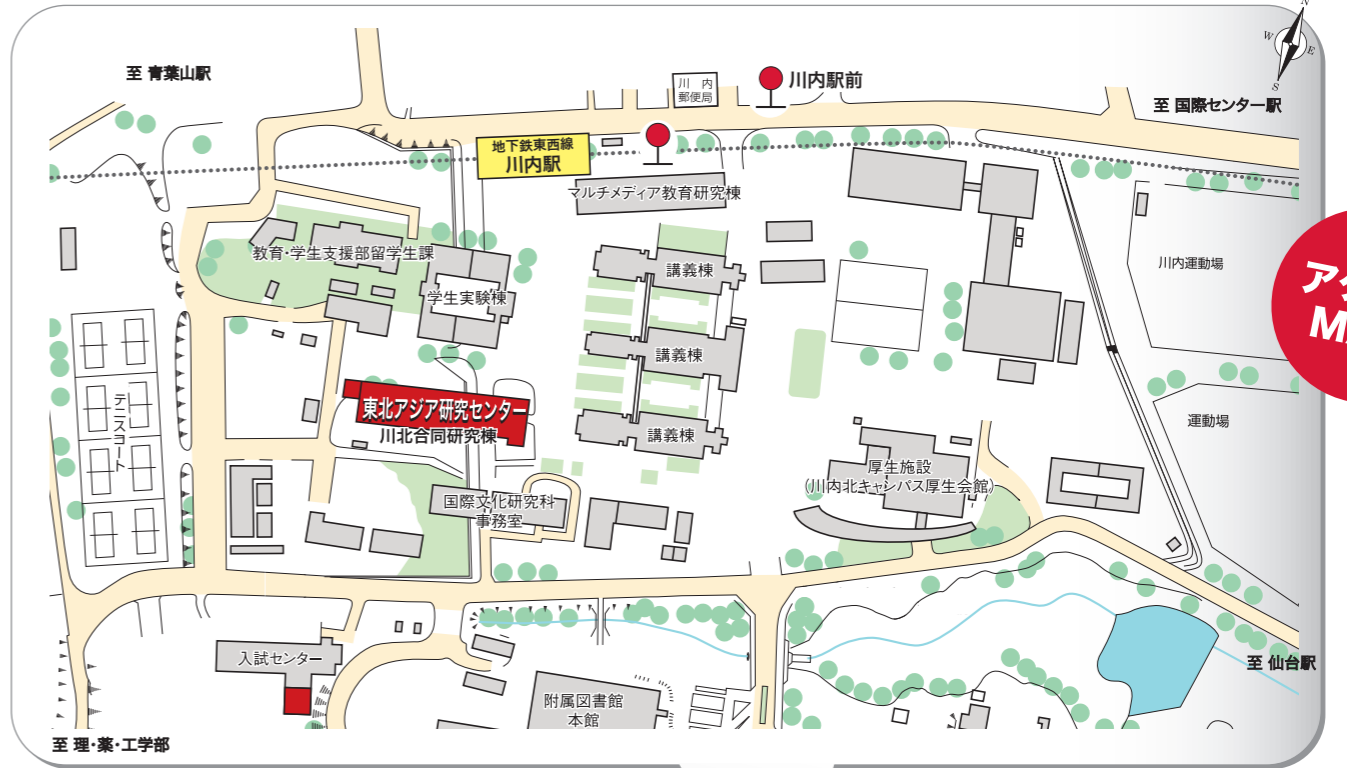
(単位:人)

学生別	部局別	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	合計
1. 博士後期	文学研究科	1	1	2	3	1	3	3	2	15
	理学研究科	0	1	1	4	4	3	3	2	18
	工学研究科	2	1	2	1	0	0	0	0	4
	国際文化研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	情報科学研究科	1	1	3	3	3	2	0	0	12
	生命科学研究科	1	1	1	1	4	5	3	4	19
	環境科学研究科	21	24	20	14	12	12	14	12	108
	小計	26	29	29	26	24	25	23	20	176

※東北アジア研の教員が「指導教員」となっている大学院生の人数

(単位:人)

学生別	部局別	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	合計
2. 博士前期	文学研究科	0	0	0	2	2	0	0	0	4
	理学研究科	2	7	7	5	8	3	5	7	42
	工学研究科	5	5	5	6	0	0	0	0	16
	国際文化研究科	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	情報科学研究科	2	3	1	0	0	0	0	0	4
	生命科学研究科	0	1	2	2	6	5	6	6	28
	環境科学研究科	11	12	14	12	10	6	4	5	63
	小計	20	28	29	27	26	14	15	19	158



アクセスMAP

Kawauchi Campus

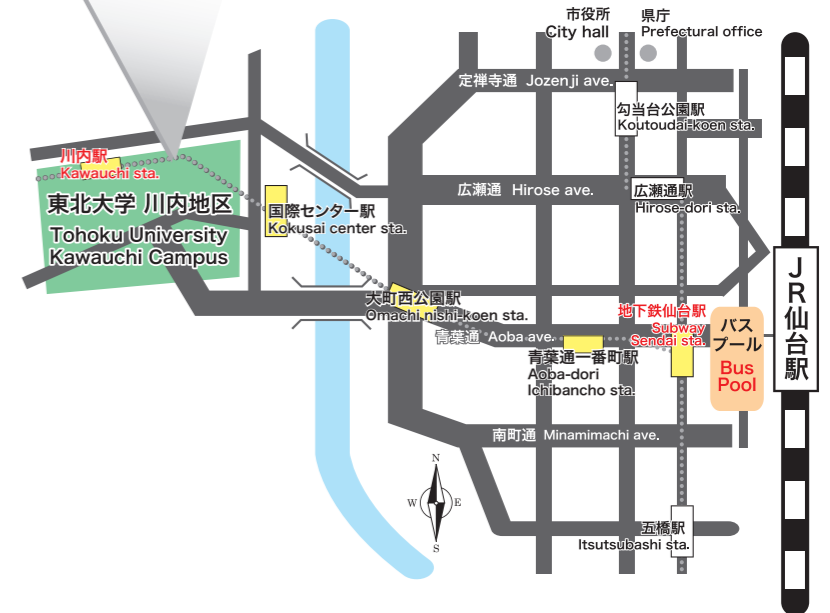
仙台駅からのアクセス

仙台市営地下鉄

東西線「川内駅」下車
 (仙台市営地下鉄東西線「仙台駅」～「川内駅」
 「南1」出口より徒歩2分 乗車時間:約6分)

仙台市営バス(15番のりばから)

「川内駅前」下車
 739・S839系統「広瀬通経由 交通公園循環」
 730系統「広瀬通経由 交通公園・川内営業所行き」
 (仙台市営バス「仙台駅15番のりば」～「川内駅前」
 所要時間:約13分)



2017年9月30日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会
 コラボレーション・オフィス
 編集協力 (有)まちのほこり研究室
 デザイン (有)グリッド
 ベース 齋藤秀一写真事務所
 印刷 小宮山印刷工業株式会社

発行

東北大学東北アジア研究センター
 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地
 Tel : 022-795-6009 Fax : 022-795-6010
 URL : http://www.cneas.tohoku.ac.jp/